

【小学校・中学校・義務教育学校用】

令和7年度学校評価 計画

達成度（評価） A：十分達成できている B：おおむね達成できている C：やや不十分である D：不十分である
--

学校名	佐賀大学教育学部附属中学校
-----	---------------

1 前年度 評価結果の概要	<ul style="list-style-type: none"> ・「学力の向上」について、研究1年目である「未来をひらく 共創する学び手の育成～エージェンシーを育む方策を通して～」の実現に向けて、研究推進部を中心に全職員への理解を進め、各教科で協働的な学びや探究的な学びを実践した。その中でAARサイクルをまわす活動を設定し、エージェンシーを育むことができるような手立てを取った。また、研究主任による全校集会での説明や研究通信の発行等を通して、生徒・保護者への周知・理解を進めた。それにより、教員と生徒・保護者とが共通の認識をもつことができた。ICTの利活用に関しては、肯定的な回答をした生徒・保護者は多かったものの、ICTの活用が「考える力」の向上につながったことを実感するという結果には至らなかった。ICTの活用方法については今後検討していく余地がある。 ・「業務改善・教職員の働き方改革の推進」について、昨年度はB評価ではあったが、今年度は勤務時間の削減に取り組むことができた。今後は、部活動廃止に向けて、社会体育への移行を進めるとともに、魅力ある学校づくりを目指し、引き続き大学と連携しながら、全職員で業務内容を検討していく必要がある。 ・「健康・体づくり」について、健康増進や体力づくりなど意識は高いものの、中学3年生は受験期ということもあり、運動する習慣が少なかった様子である。中学1・2年生も決して高い値ではないため、体育の授業や部活動の指導の中で、運動と体力の関係、健康との関係について理解を促し、習慣化へとつなげたい。 ・全体的に概ね達成できており、成果が見られる。研究についても2年目になるため、生徒と共に学校規定の見直しや実行委員会の取組など検討し、生徒達のエージェンシーを発揮する場を設定していきたい。
------------------	--

2 学校教育目標	本校の使命に応じて、高いレベルで自律し、共同することができる次世代リーダーを育成する
----------	--

3 本年度の重点目標	① 未来をひらく共創する学び手の育成を目指す。 ② 学校教育全体を通して、命や人権を大切にしている指導を行い、生徒の心と人権感覚の育成を目指す。
------------	---

4 重点取組内容・成果指標	5 最終評価
---------------	--------

(1) 共通評価項目				最終評価		学校関係者評価		主な担当者
評価項目	重点取組		具体的取組	達成度(評価)	実施結果	評価	意見や提言	
	取組内容	成果指標(数値目標)						
●学力の向上	◎様々な学びの場面で、生徒自ら目標を設定し、行動し、振り返るAARサイクルを回す手立てをとることによる、エージェンシーの育成。	○指導計画に基づき、授業実践を行うとともに、適切な評価により得られた結果などを次期計画の修正に生かす教員90% ○学校での学びが、学習意欲を高め、学ぶ意味や価値を実感できるものになっていると考える生徒85% ○課題に対して、目標を設定して取り組み、自らの取り組みについて振り返ることができる生徒85%	・各教科等における探究的な学びの在り方の追究 ・単元や題材を通して、生徒自身が見通しをもち、取り組み、振り返ることができる学習過程の検討及び実践 ・課題設定や話し合いの場の機能、振り返り、評価方法等の工夫 ・各教科における単元または年間指導計画の見直し ・課題解決へのアプローチの明確化及び他者との協働による最善解の追究	A	・指導計画に基づき、授業実践を行うとともに、適切な評価問題により得られた結果などを次期計画の修正に生かすことができていると答えた職員は96%であった。 ・学校での学びが、学習意欲を高め、学ぶ意味や価値を実感できるものになっていると肯定的に回答した生徒は96%、保護者は93%であった。 ・各教科の学びで、課題に対して自ら目標を設定して取り組み、その取り組みを振り返ることができていると肯定的に回答した生徒は94%であった。 ・どの項目においても目標値を超えているためA評価とする。 ・全教育活動を通して見直し、行動、振り返りのAARサイクルを位置付ける取り組みを行ってきたが、それが生徒にも教師にも浸透していることがうかがえる。	A	・アンケートの結果によると、指導計画実践についての職員の達成度、学習意欲等に関する生徒の達成度はいずれも90%以上であり、非常に高い結果を示していた。保護者についても80%以上であり、生徒や保護者からも高い評価をうけていることがわかる。 ・当該学校が掲げる協働的な学び、探究的な学びが実践されていることがこれらの結果から推察される。来年度以降も継続して課題解決に向けた取組を進めていきたい。	研究推進部 ○岩田、山岡、大浦、嶋
	◎ICT利活用を通じて、個に応じた指導方法、学習時間、教材等を豊かで柔軟に提供する。	○各教科等の授業において、計画的にICT機器を活用した授業で、個に応じた指導を実践できる教員90% ○ICT機器を活用した学習において、考える力が高まったと感じる生徒80% ○生徒用パソコンを利用することで情報を処理したり、表現したりする力が高まったと感じる生徒90%	・教科固有の見方・考え方を働かせるために、ICT機器を効果的に活用する学習指導の実践 ・生徒用パソコンでの教材の提示を工夫し、個に応じた学びの場の設定 ・課題に対して考えを深める場面で、協働的な学びの場の設定 ・探究的な学びにおいて、情報を適切に処理したり、表現したりする力を高める指導の工夫	・教科等の授業においては、96%を超える教員が計画的にICT機器を活用できていた。一方で、ICT活用によって「考える力が高まった」と感じた教員は73%、「個に応じた指導を実践できた」と回答した教員は77%にとどまった。 ・ICT機器の活用について、生徒の94.1%が「情報の処理や表現力が高まった」と肯定的に回答し、96.4%が「個に応じた学習が行えた」と回答した。多くの生徒が「ICT機器を有効に活用できたと感じている一方、「考える力の向上」を実感した生徒は88.3%にとどまった。 ・生徒は授業や探究活動、委員会活動などでICT機器を活用する機会が多く、高い処理力・表現力を身に付け、自分の理解度に応じた学習に取り組んでいると考えられる。一方、他の生徒と考えを共有したり深めたりする場面では、直接的な対話や模造紙・ホワイトボードの活用が多く、端末を用いた協働的な学びの効果を実感しにくい状況があると考えられる。 ・今後は、端末の特性を生かした情報共有の場面設定や、生成AIの活用によって考えを深める機会を模索し、ICT利活用のさらなる充実を図りたい。また、生徒が求める高い処理力・表現力に応えられるよう、教員のICT活用能力向上に向けた研修等も継続的に実施していきたい。	B	・ICT機器を計画的に活用できたという教員は96%以上であり、生徒においてもICT活用について肯定的な印象をもっていたことは高く評価できる。 ・探究的な学習のためにICTを積極的に活用している点は高く評価できる。ICTを学習活動に活用することの利点のひとつは個々の進捗状況に応じた対応がなされるということだと考えられるので、個に応じた指導を実践できたという教員の割合が十分とはいえないところは、今後の課題としていきたい。	B	ICT推進チーム ○空閑、山岡、久富

●心の教育	●生徒が、自他の生命を尊重する心、他者への思いやりや社会性、倫理観や正義感、感動する心など、豊かな心を身に付ける教育活動	○道徳に関するアンケートにおいて肯定的な回答をした生徒85%以上	・各教科の授業で、お互いが認め合えるような場の設定 ・学年職員のローテーションにより、組織的かつ計画的な道徳教育の実施 ・人権週間において、命や人権について考える機会を設置 ・夏季に人権・同和教育に関する職員研修を実施	A	・道徳に関するアンケートにおいて、肯定的な回答をした生徒が95.1%であったため、十分達成できたと考ええる。 ・次年度も豊かな心を育成していくために、互いを認め合う場や、命や人権について考える機会を設定していきたい。 ・夏季に「蔑称語の不適切使用事象への対応」及び「同和地区に関する問い合わせへの対応」研修を実施した。今年度は、教員だけでなく、普段、電話対応をすることが多い事務職員にも別途実施し、本校の教職員がそれぞれの事象に対応できる実践力を高めることができた。	A	・アンケート結果が高い達成度を示していることは評価できる。 ・次年度についても、明確な目標を掲げており、今後の活動が期待できる。今後も生徒にさまざまな知識や体験を提供し、人権に対する高い意識や豊かな心を育成していただいたい。	人権・同和教育部 ○久富、山岡、内田
	●いじめの早期発見、早期対応体制の充実 ●計画的、継続的な支援体制の充実	○いじめの防止など(いじめの定義、いじめの防止等のための取組、事案対応等)について組織的に対応ができていると回答した教員、生徒ともに85%以上	・心の扉(月1回)、いじめ実態調査(年3回)、教育相談等による生徒の状況の把握 ・生徒主体生活による人権学習の実施、生徒会と連携し、いじめゼロ宣言を活用するなどして、いじめを許さない心の育成	A	いじめ等の問題に対し、「連携を取り組織で対応している」、「調査等を活用し未然防止に取り組んでいる」について全ての職員が肯定的な回答をしている。生徒においても「いじめ防止に取り組んでいる」が95.9%、「相談しやすい環境があるか」が85.8%と多くの生徒が肯定的に捉えている。次年度も継続して生徒とともに、安心して過ごせる環境をつくり、肯定的に捉える生徒を増やしていきたい。そのために心のノートや心の扉、いじめ実態調査などを活用し、日々の生徒の実態把握に努めるとともに、人権に関する授業を展開していく。	A	・今年度もいじめに関する報告が数件あったが、いずれも教員同士が連携し、解決に向けて当事者に積極的に働きかけていた。 ・アンケート結果では生徒、教員ともにいじめ防止に対して肯定的な回答を得られており、高く評価できる。ただいじめの報告は毎年数件発生しているため、いじめ事案が皆無になることを目指して、取り組んでいくことを期待する。	生徒指導部 ○空閑、中原、釘本
	○エージェンシーを発揮する場としての生徒会活動や学校行事の充実	○「自分たちの手で学校を創っている」について肯定的に回答した生徒80%以上	・生徒会活動について説明する対面式の設定 ・年2回の生徒総会を開催、自治の意識の醸成 ・生徒と教師が共にAARサイクルを回すことによる共創の姿勢の重視	A	・「生徒会活動や学校行事などの様々な活動を通して、自分たちの手で学校を創っているという実感をもつことができたか」という質問に肯定的な回答をした生徒は87%だった。保護者アンケートでも「生徒たちが、自分たちの手で学校を創っていかうという姿が見られたか」という質問に対して、肯定的な回答が97.6%と非常に高かった。よって、十分に達成できたと判断できる。学校行事における生徒と教師の共創する姿勢がこの結果につながったと考えられる。次年度は、生徒会活動における共創を模索していきたい。	A	・生徒に対するアンケート結果によると、自発的に生徒会活動に参加している生徒が大半を占めていた。さらに自主的な学校活動への意欲が向上しているということから、生徒の主体的な活動がなされていることをうかがい知ることができた。 ・保護者からも生徒会活動に対して非常に高い評価を得られており、今後も生徒の自主的な活動を見守っていくことが大事だと思う。	特別活動担当 ○嶋、添田、原田、山岡
●健康・体づくり	●運動習慣の改善や定着化	○健康・体づくりに運動習慣は大切と考える生徒80%以上 ○授業以外で運動やスポーツを行う時間の合計が、1週間で90分以上の生徒80%以上	・運動習慣形成に関する意識調査 ・運動時間や過当り運動頻度の実態調査 ・調査結果と体力の関係を説明し、運動習慣の改善を推奨	B	・健康や体力向上に運動が大切と考える生徒はよくあてはまると回答した生徒が78%で、あてはまると回答した生徒が20%と合計すると98%とほとんどの生徒が運動の大切さを理解している現状であった。 ・授業以外で運動を行う時間の合計が過当り60分以上の生徒は60%であった。 ・学級指導や部活動指導の中で、生活の中に運動習慣を取り入れることの大切を指導することができた教員は71%であった。 ・子供の健康や体力づくりを意識して改善に取り組む保護者は70%であった。 以上のことから、健康増進や体力づくりの意識は高いものの、運動習慣へ結びついている生徒が少ないことがわかった。要因としては中3が受験期ということが影響したと考えられる(中3のみ29%)。運動習慣が定着化できるような体育的行事を生徒会や保護者、地域と連携をして積極的に取り組んでいきたい。	B	・身体的に急激に成長していく中学の時期において、運動によって筋力や体力を向上させることは重要であり、生徒自らが運動の必要性を理解し、実践しようとする態度を身につけることが求められる。 ・アンケート結果において、運動の必要性を理解し、生活習慣を改善しようとする生徒や保護者が一定数みられるものの、さらに取組を強化する必要があると考えられる。 ・次年度以降、部活動が廃止されるため、運動習慣が極端に減ってしまう生徒が増える可能性もあるので、対処が必要である。	保健・安全 ○釘本、樹谷、体育科
	●基本的な生活習慣の意識化と定着	○「健康において運動、食事、睡眠は大切」と考える生徒90%以上	・保健室来室時における生徒の実態把握 ・長期休業前の保健指導や、学年育友会を通じた家庭への啓発 ・生徒会健康づくり部の企画「シエスタ大革命」と運動した啓発活動および実践化	A	・県が実施した「食事・健康に関する調査」では、約97%の生徒が「健康において運動、食事、睡眠は大切」と回答しており、目標値は上回っているものの、県平均をわずかに下回った。 ・1日3食、食事をとることができている生徒の割合は全体で93.7%、ただし、朝食に限定すると、90.5%の喫食率とやや低くなっている。 ・睡眠休養感(睡眠で休養がとれている感覚)に関する質問では、76%の生徒は睡眠休養感を得られるくらい睡眠時間が確保できていると自覚しているが、24%の生徒がこれに該当していない。また、保護者からみた生徒の睡眠休養感は、71.7%と更に低く、その要因や、生活習慣の見直しが必要と思われる。3年生では、睡眠休養感を実感できていると回答した生徒が81.1%と他学年と比較して高く、受験期を意識した規則正しい生活を送ることができているとうかがえる。	A	・アンケートによると、ほぼすべての生徒が運動、食事、睡眠の重要性を理解しているという結果であった。 ・朝食をとっていない生徒が10%程度いると思われるので、生徒と共に保護者にも食事に対する意識をより高めるように啓発していくことが望まれる。	保健・安全 ○樹谷、体育科
●業務改善・教職員の働き方改革の推進	●業務効率化の推進と時間外勤務時間の削減	○時間外勤務を削減できるよう努力した職員80%以上。昨年度の時間外勤務の平均時間を下回る。	・退勤時間の掲示、アナウンス ・業務内容精選、見直しのための会議設定 ・会議資料等共有の仕方の工夫 ・勤務間インターバルを導入し、退勤から次の出勤までの休憩時間を11時間以上を確保する。 ・R8に向けた課外活動のプレを実施 ・アンケートをデジタル化する	A	・勤務間インターバルの実施状況を把握するために、退勤から次の出勤までの休憩時間を11時間以上取ることができたかという質問に対し、「よくあてはまる」「あてはまる」に回答した教員が86%であった。業務内容を精選・見直したために積極的にアイデアや意見を出すことができたかという質問に対し、肯定的に回答した職員が86%であった。保護者アンケートでも89%の保護者の方が肯定的に回答して頂いた。 ・比較的高いアンケート結果であるが、勤務間インターバルで11時間以上取ることが難しかった職員もいたことは課題である。引き続き、業務内容の精選と見直しに努めたい。今年度は、会議資料の事前配布を行い、議題を先に確認してもらおうようにしたり、行事予定を早めに共有するようになった。また、行事ごとに振り返りを行い、次年度への改善点や引継ぎを確実に行うようにした。次年度は、部活動廃止に伴う放課後の時間の使い方を検討していくことで、業務改善につなげたい。	A	・働き方改革が求められる中で、退勤から出勤までの休憩時間が十分に取れているとアンケートについて、全職員が当てはまると回答をしているということであり、改革が進んでいると評価できる。 ・働き方改革の一環として、令和8年度から部活動の完全廃止を掲げており、それにむけて現行の部活動保護者に向けての説明会等を頻繁におこなっている。部活動についても社会体育へスムーズに移行し、教員の業務の軽減をさらに進めていくことが重要である。	校長・教頭・教務

(2)本年度重点的に取り組む独自評価項目				最終評価		学校関係者評価		主な担当者
評価項目	重点取組		具体的取組	達成度(評価)	実施結果	評価	意見や提言	
	重点取組内容	成果指標(数値目標)						
○教育実習	○実習生の指導技術の向上や達成感を保障する実習指導の充実 ○大学との連携	○教育実習後のアンケートで達成感・充実感があると回答した実習生80%以上 ○教育実習中の大学教員による視察・指導の達成80%以上	・指導教員による魅力的な教職モデルの垂範 ・実習日誌等を通じた、実習生の達成感や成長の様子の確認及び指導・助言 ・大学教員との情報共有	A	・5月の併免教育実習生へのアンケートでは、達成感・充実感が「とてもある」と回答した実習生は63.2%、「ある」と回答した実習生をあわせると100%となり、十分達成できている。 ・9月の主免教育実習生へのアンケートでは、達成感・充実感が「とてもある」と回答した実習生は76.0%、「ある」と回答した実習生をあわせると100%となり、十分達成できている。 ・教育実習中の大学教員による視察・指導は、5月・9月の両実習とも79%と目標(80%)はわずかに達成できなかった。理由として、大学の担当者のスケジュール調整が難しかったことが考えられる。80%の目標達成、さらには100%を目指して、今後も粘り強く実習校への訪問をお願いしていく。	A	・すべての実習生が達成感、充実感を感じているということであり、実り多い実習が実践されていることがうかがえる。附属の先生方のご指導、ご協力によるものであり、感謝申し上げます。 ・実習中の大学教員の視察・指導の実績がやや減少しているとのことであるが、これは大学側の問題であり、大学教員においては、担当学生を責任をもって指導していくよう周知徹底させていくことが強く求められる。	教頭
○研究	○エージェンシーを育成するための工夫 ○AARサイクルを取り入れた学習過程の実践 ○生徒が主体となる活動の場の設定	○授業の中で見通しをもったり、個またはグループで課題に対して吟味したり、学習内容や学び方を振り返ったりする時間が確保されていると思う生徒90% ○学校での様々な活動を通して、ウェルビーイングという目標を意識して主体的に行動できるようになった生徒80% ○学校での様々な活動を通して、これからの予測困難な時代を生き抜く力が身に付いている生徒80%以上 ○授業の中で、生徒が見通しをもって課題に取り組んだり、学び方を振り返らせることで、エージェンシーを育成することができた教師85% ○教科の本質を追求する研究を推進した教師90%以上	・エージェンシーを育成する視点に基づくカリキュラムの編成 ・AARサイクルを回すための手立ての追究 ・B-Timeの再検討 ・生徒が主体となる活動のあり方の追究	A	・授業の中で見通しをもったり、個人やグループで課題を吟味したり、学習内容や学び方を振り返ったりする時間が確保されている生徒は93%であった。 ・学校での様々な活動を通して、ウェルビーイングという目標を意識して主体的に行動できるようになった生徒は91%であった。 ・教科の本質や指導法改善に追究する研究にとりくめた教師は100%であった。 ・学校での様々な活動を通して、これからの予測困難な時代を生き抜く力が身に付いている生徒は93%、保護者は92%であった。 ・あらゆる教育活動の中で、生徒に見通しをもって課題に取り組ませたり、学び方を振り返らせたりさせることで、エージェンシーを育成する実践ができた教師は86%だった。 ・教科の本質や指導法改善を追究する研究を推進した教師は100%であった。 ・どの項目も目標値を超えているためA評価とする。 ・「エージェンシー」「AARサイクル」「ウェルビーイング」といった言葉が教師や生徒の間に共有され、これからの予測困難な時代を生き抜く力(=エージェンシー)を育てていくというビジョンが共有できていることがうかがえる。	A	・附属学校の存在意義として、それぞれの教員が研究を進め、地域の教育力の向上に寄与することが求められているが、アンケートの結果、すべての教員が指導法改善の研究に取り組むことができたことと回答しており、附属の教員として高く評価すべき人材であると考えられる。 ・また教員の研究成果が生徒の学習活動にも活かされていると生徒や保護者にも理解されていることがアンケートから読み取ることができる。 ・今後は研究成果を研究発表会等で広く発信していきたい。佐賀県の教育発展のために活動して行ってほしい。	研究推進部 ○岩田、山岡、大浦、嶋

●・・・県共通 ○・・・学校独自 ◎・・・志を高める教育

5 総合評価・ 次年度への展望	<p>・「学力の向上」については、教員、生徒ともに、AARサイクルを位置付ける取り組みを共有することで、各教科等における協働的な学びや探究的な学びを実践した。ICTの利用に関しては、ICT機器を利用することが「考える力」を高めるというより、考えるためのツールとしての利用し方を検討していく必要がある。</p> <p>・「健康・体づくり」について、健康増進や体力づくりなど意識は高いものの、実際に運動している時間は多くなかった。今後は、部活動が廃止されることから、運動を行う時間や場所についても検討するとともに、体育の授業を通して、運動と健康との関係について、引き続き啓発していきたい。また、「健康において運動、食事、睡眠は大切」と答えている生徒の割合に対して、実際の睡眠時間が確保できている生徒の割合が少ない。生徒会の企画と関連付けて、啓発活動を実施していく。</p> <p>・「業務改善・教職員の働き方改革の推進」について、目標値は達成しているものの、勤務間インターバルに課題が見られる。部活動廃止にともなう、放課後の時間の有効活用や、会議時間の削減など、資料や情報共有の方法を工夫しながら業務改善を検討していく。</p> <p>・「研究」については、「未来をひらく 共創する学び手の育成～エージェンシーを育む方策を通して～」の実現に向けて、研究推進部を中心に全職員でAARサイクルをまわす取組を実践したことで、AARサイクルなどの言葉を教師と生徒の間でよく共有されている。次年度は研究のまとめになるため、生徒のエージェンシーがどのように育成されたのかを検討したい。</p> <p>・その他の項目については、概ね目標値を達成している。学校教育目標の実現に向けて、引き続き継続して取り組んでいく。</p>
----------------------------	--